



・職人が職人を描いたら
 ・ゆく河の流れのように
 ・信じることの強さと脆さ
 ・華やかな世界を目指す
 二人の物語！

職人が職人を描いたら

マンガはあまり読まないが、新刊コーナーは常にチェックしている。思わぬ収穫があるからだ。二〇二三年度はすごかった。なにせ『神田ごくら町職人ばなし』と『龍子』を見つけたのだから。前者は、杉浦日向子が生きていたらきつと気に入っただろうな、と思わせる女桶職人の緻密な描写に引き寄せられた。後者は濃いグリーンをバツクに単車に跨る全身豹柄のボデイスーツの女に「龍子」の紫の筆文字が被せられる圧倒的なビジュアルにやられた。どちらも年末のマンガ・ランキングを賑わせ（「フリースタイル THE BEST MANGA 2024」で前者一位後者四位、「このマンガがすごい2024」で前者三位後者十三位）、我が目の確かさを誇らしく思ったのだった（こんな事は滅多にないけど…）。

鍛冶、紺屋、畳刺し、左官。昨今の刀ブームから名刀を生んだ刀匠にスポットが当たるとはあるだろう。左官にも芸術的な鏝絵をものした天才は確かにいた。けれどこのマンガの職人たちは市井の人。時に悩んだり、迷ったり、衝突したりしながらも、己の技量に誇りを持って生きている。そして、その職人の技が江戸の庶民の暮らしに彩りを添える。

桶職人は商売や家事でぼろぼろになった桶を片っ端から直してやりながら、木は桶の部品の一片になっても生きていて、干乾びさせられるような使い方をせず、常時水を吸わせるように大事にしていれば百年は持つ、と諭す。自分が打った刀が子どもを殺めたことを知った刀鍛冶は、持てる技量のすべてを注ぎ込んだ刀を作る。手に取った者が業物のあまりの凄みにおののいて抜く気をなくすようにと。紺屋は単色の藍染より華やかな友禅を羨むが、その友禅も実は単色の茶屋染めの技法を流用したものであると教えられたことから、白の



線よりも地の藍の美しさを再発見し、それを活かす図案を生み出す。暮れの廊へ貼り替えて貼った畳が疲れた花魁の心身を癒していることなど露知らない。上方から流れてきた腕利きの左官が任された茶室と、棟梁として初の大仕事となる江戸の左官が仕上げる土蔵。考え方も生き方も違う二人が切磋琢磨して手掛けた建物が、百年の時を経て町の象徴（かお）になる。

それぞれの職人の技や作業の工程が、これ以上はない精密さで描かれ、目を見張る。そのすごさは視覚だけに留まらない。木を削る音、鋼を鍛える熱さ、藍染や新しいいぐさの匂い、なまこ壁のひんやりとした手触りや土壁の温もりまで感じられるようだ。江戸の町がマンガから立ち上がってくる。

著者の坂上暁仁はこれがデビュー作というが、もはや職人の域。まだ一巻目。続きが本当に楽しみだ。

締切が守れない

行動経済学的理由

人の行動は、思いもよらない何かに影響されている。人間の先入観や偏見などが原因となり、書籍のタイトルのように「勘違い」が人を動かしている。こういった心理学的な要素を経済・ビジネスと組み合わせた学問が「行動経済学」と呼ばれる。

この書籍では、人の行動に影響する要因や、誘導するための方法が細かく解説されている。経験則から思い当たるようなものもあれば、「自分はこんなものでは騙されない」と疑う内容もあるだろう。中には、自分をうまく騙して、怠け癖や先送り癖を改善させるような手法も紹介されている。色分けされていないスケジュール帳を使うと、日程の連続性が強く感じられるため、土日に色が付いたものより早く作業に着手できる傾向があるらしい。また、締切を指定する側が具体的かつ差し迫った日付を指定することなども影響すること。ただ、こういった理論を知識として得てしまふと、悪い使い方をしてしまう。余計な知識をつけずにまっすぐ仕事ができたい頃がもう思い出せない。

教養として必要な知識である

ことは間違いないが、悪用しない自制心も必要なのだろう。



復興を願って

「こうてくだ、こうてくだ。ぶりとかにと たこと いか。さっきまで うみで およいどった。けさ おらちの ふねで とつてきた、とれたてやぞ。」

『あさいち』は、一九八〇年代の輪島朝市の活気ある風景が描かれた絵本だ。長らく廃刊となっていたが、能登半島地震で被害を受けた被災地復興への願いを込めて、三月に復刊した。

冒頭の台詞は、朝市で商売をしている女性たちの呼びかけの言葉である。冬の寒さに負けないように、綿をいっぱい詰められたはんてんを着込みまんまるになった女性たちが馴染み深い方言で語り掛ける様子が胸にじんときく。

ただものを売るだけの場ではない。女性たちにとって朝市は家庭からいつとき解放される、憩いの場でもある。お互いの家族や健康

を気づかかったり、売り物をおすそわけして助け合う精神も絵本には描かれている。

挿絵を担当した画家の大石可久也氏は淡路島出身の洋画家で、何年も朝市に通い続け丁寧な取材を行ったという。絵本を開くと、通りを実際に歩いていっているような臨場感で、いきいきと会話する人々の口もとから、吐く息の白さまで見えてくるようだ。ついつい「じゃあひとつもらおうかな。」と呼びかけに答えたくなくなってしまふ。

日本最古の朝市と言われる輪島朝市。その起源は平安時代にあると言われており、千年以上の歴史がある。その間にも存続の危機は何度もあった。特に最近では新型コロナウイルスの影響で観光客が激減したことが記憶に新しいだろう。どんな危機も乗り越え、人々は出店を続け、その精神は受け継がれてきた。

一日も早く、朝市の風景が、日常が戻ることを、そして冒頭の呼びかけに私たちが実際に答えに行ける日が来ることを願ってやまない。



ゆく河の流れのように

皆さん、食べることは好きですか？私は、料理が趣味になってしまいうくらいには大好きだ。しかしながら、人にどれほど褒められても、これを生業にしようとは思わない。「料理」と「仕事」がどうも合致しないのだ。そんなわけで、職業…料理人の方々がどんな考えを持っているかを知るために、『厨房の哲学者』を手にとった。

本書は中国料理シェフ脇屋友詞さんがその料理人人生を綴った一冊だ。幼少の頃から才覚があったことや、衝撃的な料理と出会ったこと、泥臭い努力を積みつつ親方の技を目で盗んだことなどは、料理人の経歴としてそこまで珍しくはないだろう。だが、中国料理の道に入った理由があまりに突飛だ。帯にある「選ばれるを得なかつた仕事」「運命に従え」が誇張でも何でもない人生の岐路には、哀れみすら感じる。その後、偶然に出会ったある言葉に感銘を受け、中国料理を自身の道と定めるのだが、その決断はなかなかできない。

脇屋氏の才能は、料理そのものはもちろんのこと、現状に満足せず、新しいことを思いつき、それを次々に実践していくことであると思う。それらには店の売上を倍増させた

ものもあれば、結果が出なかったものもある。すごいのは、下積み時代や、独立して苦戦していた頃、有名になった後や、コロナ禍などの困難な時期も、変わらずその姿勢を貫き続けていることだ。料理に向き合う姿勢も同様である一方、湯（タン…日本料理における出汁）の取り方など、徹底して伝統的なやり方を守っているのも興味深い。長い伝統と歴史を持ちつつ、新しい技術を利用する、中国料理の懐の深さを体現したような料理人と言えるだろう。

本を読んで、かつて実家の近くにあった「高尾」という中国料理店を思い出した。その店で供された料理は、私の中国料理の概念を三回くらい吹き飛ばしてくれたが、不思議なことにもぎれもなく中国料理だった。せっかくなので、思い出の中国料理店「四川乃華」や「リトル上海」に行きたくなったが……。いや、今の私に必要なのは中華鍋であろうか。



脇屋友詞

一歩前に

踏み出すために…

登場人物が自身の本音に向きあい一歩前に進みだす物語を三作紹介します。

『絶対泣かない』、働く女性が悩んだり喜んだりする姿は現実でもありそうです。仕事の数だけ考え方や取り組み方も人それぞれだと思えます。どの登場人物も仕事に対する戸惑いや迷いを抱きながらも最後には自分の進むべき道を決めるところに惹かれます。「あなたがあなたの仕事をすきになれますように」作者のあとがきも秀逸です。

『プラナリア』、無職がテーマです。病氣、リストラ、子育てなど現状に鬱屈した気持ちを抱いて生きる主人公達の短編集。主人公たちが最終的には自分の心に忠実に行動する姿がよいです。

以上二冊山本文緒さんの著作は最近のものではありませんが、人の心の動きに共感できる話だと思えます。

最近の作品で心に残ったのは、『ネコシェフと海辺のお話』です。ネコシェフ、その名の通り猫がシェフ。設定のファンタジー要素で心癒されます。ネコシェフは（よい働き）をします。思い悩む



人々が引き寄せられるように立ち寄りネコシェフと話しし食事をする。そこで登場人物が本音に向き合い前向きになる姿に元気をもらえます。

信じるいのちの

強さと脆さ

角田光代、待望の長編小説『方舟を燃やす』は、全編が不穏な空気に満ちている。唐突に突き放されるような結末に驚くが、今、読後の深い余韻の中で、じわじわと胸が熱くなってくる感覚がある。

主人公は二人。一九六七年、鳥取で生まれた飛馬は、昭和のオカルトブームの中で育つ。一方、戦後すぐの時代に生まれた不三子は、マクロビオティックの考えに基づいた食事で子育てを行う。縁もゆかりも無かった二人の人生は、昭和・平成を経て、コロナ禍の子ども食堂で交錯する。

この二人に共通するのは、混沌とした時代の中でも、仕事や育児、奉仕活動において、自分に与えられた使命を信じて、誠実に役割を全うしてきたということだ。その結果が望んだ形にならない理不尽さは残酷だが、傷つきながらもまた、何かを信じて前を向く。

不三子は新聞の人生相談の回答にあった「みなそれぞれにひとしく偉業なのです」という言葉に涙する。子育てで、日々これでいいのかと迷ってばかりの私も救われるような気持ちになった。

デマやフェイクニュースが飛び交い、何を信じていいのか見極めが難しいが、惑わされ、失敗する人にも作者の視線は優しい。信じて乗り込んだ方舟はいつ燃え落ちるかもしれない。自分が何を信じて行動するべきか、五感を研ぎ澄まして考えなくてはならない。⑥



角田光代

明日の運転士が

決まっています！

著者は大学卒業後、首都圏のバス会社に総合職として一年半勤務した。その後JRで駅員、車掌として働いた経歴の方で、現在交通系ユーチューバーとして活動中。

バスの営業所の運行管理者が二十四時間勤務(午前十時〜次の日の午前十時、途中仮眠はするが)だなんて、想像もしたことがなかった。

確かにバスは早朝から夜まで運行されているのだから、当然だ。毎日百台分、つまり、百名の運転士が必要で、運転士不足のなか、常に誰かが休日出勤や残業しながら運行している。一名の欠員でも埋めるのに前日の夜十時まで決まらないこともある。各人の勤務時間間隔を守りながら組み替えたりして、何とか運休を阻止する。また、営業所の日勤は基本二名でクレーム対応、路線案内など(大手はコールセンターが担当)接客の仕事もある。

運行管理者は、ストレスで休職者がでるほどの反面、著者がいた会社は、路線バスのスケジュールは何か月も先まで決まっているので、有給休暇、連休は取得しやすい。また、公共性や信用度は高い仕事なので、ローンの審査が通りやすいなど良い面も紹介している。

勤務時間間隔が八時間から九時間になることで、今までよりも残業をめいっばいしたいといった個人の希望に沿ったシフトは組めなくなるなど、二〇二四年問題にも触れている。

規模は違うが、書店も基本三六五日ほぼ定休日なしで営業している。夜勤までではなくても、営業時間は長く十〜二十人のシフト作成でもパズルのようで憂鬱になることがある。三六五日切れ目なく運営している職種の人にはあるあるというか、親近感が湧いてくる内容だ。⑦



賢者の自負

NISA制度の改正の影響もあり、お金を増やす為の投資本が、書店の売り場に溢れています。そんな中、目を見張るような本物の一冊、『お金は君を見ている』が登場しました。著者は、韓国人のキム・スンホ。アメリカに渡り、貧困生活と事業の失敗を乗り越えた末に、外食産業で大成功したという経歴の人物です。

非常にお金持ちの著者ですが、傲慢なところはなく、高潔な人柄、厳格な考え方や品位の高さに感心させられます。そして波乱万丈な経験に裏打ちされた言葉の重み。他の書籍のそれとは一線を画しています。投資に関するコツや人生の教訓は非常に説得力があり、言葉の一字一句を堪能できます。もっとも、謙虚な姿勢とは裏腹に、言葉の端々から、成功者としての強烈な自負を隠せていないのです。

しかし、この本を私が推したい理由は、(富)の真理を示してくれるからでも、お金持ちになる考え方を教えてくれるからでもありません。本書を読み進めながら、キム・スンホという一人の人物の人生哲学に触れ、その人生ドラマを追体験して、それらに強く感銘を受けるものがあつたからです。

なお、キム・スンホは、十年近く前に、「当社の従業員がお客様に失礼な行動をした場合、従業員を解雇します。しかし、従業員に失礼な振舞いをするお客様はお店から出て行ってもらいます。」との告知をフェイスブックに投稿して、話題になった経営者です。(公正)に対する彼の信念の強さを感じて流石です。⑧

華やかな世界を目指す

二人の物語！

一話目の完成度がとても高く、惹きつけられる漫画に出合った。とある高校を舞台に、元モデルの男子生徒・宇田川アイアと背は高いが顔のそばかすを隠すように背中を丸めている女の子・炭崎純が学園祭のコンテストに出場することになるという出だしだ。

二人が参加する「葵コン」は、衣装やメイク担当のスタイリストト役と、ランウェイを歩くモデル役の二人一組という独特なルール。クラス代表として押し付けられた形だが、周りからの期待に反して、アイアがメイク役、純がモデルになることを二人で話しあう。顔のそばかすへの視線を

にしていた純が堂々とランウェイを歩く姿はとてまかつこ良いので、ぜひ第一話を見て欲しい。学園祭を経て、アイアはメイクアップアーティストに、純はモデルになる、というそれぞれが諦めていた夢に向けて動き始める。アイアは、先に行く同世代のライバルたちと出会い、どうしてもう少し早く夢に本気で向き合うことを

描かれる。自分が劣るところを認め成長していく姿が眩しく、作中で何度かあるメイク対決はそういった葛藤からの成長が丁寧に描かれるのでおすすめです。メイクやモデルという華やかな業界が描かれていくが、二人の

夢への熱量からスポ根的なところがあって、読んでいて目が離せない。二人がそれぞれの夢を叶えるまで見届けたい作品だ。

労働の源流

正規・非正規・パート・アルバイトなど現代における働き方の始まりはいつ頃だろうか。明治における近代化に関係あるかと思いきや、その源流は江戸時代とみるのが『仕事と江戸時代』である。

貨幣での安全なやり取りが行われるようになったのは江戸時代であるが、身分での働き方が固定され職業選択の自由は無きに等しいことがうかがえる。武士の中でも正規雇用・非正規雇用が混在し、特に専門知識を持つ武士は

非正規というものが多かった。現代における博士になったけれど……という状況に似ているが、江戸の非正規雇用武士は高給取りではあった。

正規雇用の番方(ばんかた)と呼ばれる職種は江戸城の警衛が主な業務。宿直もあるため当番日と非番日が順にくるといふ消防・警察のような働き方。行政を担当する役方(やくかた)は朝から夕方までの勤務、自らの屋敷でも勤務可能であり、裁量労働制に近かった。現代の公務員の働き方や在宅勤務などに近いものが江戸時代にもすでにあったようだ。

一方、町人はどうだろうか。就業形態で最も多かったのは自営業であり、次に多いのはパート・アルバイトや日雇い労働者に似た存在。「宵越しの金を持たない」とは江戸っ子の気前の良さを表す言葉として知られるが、当時の町人の働き方は、半年または一年程度の雇用契約が多く、貯蓄どころではなく「持たない」のではなく「持てない」のが実情らしい。他、百姓の働き方についても触れられている。

劇的な経済発展があった江戸時代だったからこそ、そのための労働も多様になった。「現代の働き方、江戸に始まる」といえる。

あなたは、どんな仕事がしたい？

お仕事ってどうしたらいい？ 働くって何？ 人気絵本作家ヨシタケシンスケの新作「おしごとそうだんセンター」は、児童書だが、日々の仕事を淡々とこなすだけになってしまった大人にこそ是非読んでほしい「ハローワーク」ストーリーだ。

記憶喪失で仕事を探す宇宙人がおしごとそうだんセンターのお姉さんと仕事とは何かを考える。その途中に挟まれる宇宙人の希望の「めずらしいしごと」が2ページしかないのに、オチまであるところがまた、素晴らしい。

何故お仕事をするのかの基本から始まり、仕事の探し方、そして仕事が一番大事とは限らないと伝えるところに、ハッとさせられる。合わない仕事や人間関係が良くないのなら、そこから離れて新しい仕事を探すと良いと言いつつ、衝撃と眩しさを感じる。今この本を手にする子どもたちは幸せだ。

ただ一つだけ、めずらしいしごとの中の「読書感想文代筆屋」だけは個人的に書店員としては、職に就いてほしくないなあと思う。大変だが、本を読みどんな感想でも良いから自身で書き上げる事できつと、為になることがあるから。

……この原稿も悩まずに書けるようになるのかな。



37 翻訳家の池央耿さんが七くなられた。本紙面でもアンモやホーカンなど訳書も何度か取り上げたばかり。ご冥福をお祈りしたい。

池さんの訳文の特長は何と言ってもその格調の高さだ。随所にちりほめられる漢語・故事・成語・慣用語が見事な程にセリとハママ、他に類を見ない。

それでいて決まらず、くなくないどころか、むしろクセになるのが不図に議であったが、著書『翻訳の華鏡』を読んで、海外を敬愛しておられたことを知り、妙に納得してしまつた。

訳業はミステリ、SFはもとより、フルカマヤ、マイルの大ベストセラーも手掛けておられ、まさに翻訳職人と呼ぶに相応しい。雑誌「紙魚の手帖」の追悼記事にあるベストワックスを読み進めるカクオンであた……つづく

【書誌情報】『翻訳の華鏡』(池央耿／河出文庫) 九〇〇円、『紙魚の手帖 vol.14 DECEMBER 2023』(東京創元社) 一四〇〇円 ※価格は本体価格です。